

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

がん患者遺族に対する  
集団精神療法の検討

A study of the Group Psychotherapy  
for the bereaved  
who lost family members with cancer

2012年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

石田 真弓

ISHIDA, Mayumi

研究指導教員： 野村 忍 教授

日本人に最も多い死因は悪性新生物（がん）である。がんは昭和 56 年以降死因順位第 1 位となり、全死亡者のおよそ 3 人に 1 人はがんで死亡している。一方で、遺された遺族にとって、その死別はストレスフルなライフイベントである。死別を経験することにより、死亡率の上昇、精神・身体・行動面に様々な影響を及ぼすことが報告されている。

本博士論文の目的は、本邦で最も多い「がん患者遺族」に焦点を当て、死別経験後に何らかの苦悩を抱え、医学的な援助を必要とした者を対象に、その苦悩について詳細に調査し、適切な精神療法を検討することとした。

本博士論文は、全 8 章から構成され、第 1 章ではこれまでに報告されている遺族に生じる様々な問題について整理し、その影響についてまとめ、援助を求めるがん患者遺族の詳細な検討の必要性を指摘した。

本博士論文では、「遺族外来」としてがん患者遺族の診察を行う、全国唯一の医療機関である埼玉医科大学国際医療センターを対象に研究を行った。本遺族外来は、がんによって愛する人を亡くした遺族に対し、その苦悩を軽減させるための精神医学的・心理的援助を行うことを目的とした診療を行っている。

第 2 章では、第 1 章での先行研究の現状を踏まえ、本博士論文の目的と構成・意義をまとめた。

第 3 章の研究 1 では、遺族外来受診者の特徴について、女性の受診患者が多いこと、初診時にうつ病の診断を満たす者が約 4 割に認められたことを明らかにした。また研究 2 では、遺族外来を受診した女性で、うつ病を罹患した症例の検討を行い、類似する死別反応による症状と、うつ病の症状の相違を確認し、援助を行う際に注意すべき点を明らかにした。

第 4 章の研究 3 では、遺族外来受診患者の抱える苦悩について詳細を調査し、特徴を明らかにした。その苦悩は、がんの経過に関する本人の理解や認識と関係していることが明らかになった。

第5章の研究4では、先行研究と研究1、研究2、研究3を踏まえ、がん患者遺族として医学的援助を求めた者の苦悩の軽減に適した精神療法の検討を行った。その結果、現状への適応力を意識した介入を集団精神療法の中で行うこと、介入手法として認知行動的技法を用いることが考えられ、集団精神療法プログラムを開発した。

第6章の研究5では、開発した集団精神療法プログラムを用いた介入を実施し、介入前後で抑うつ、怒り・敵意、QOLや不安感が改善する結果を得た。さらに、医学的援助を求めた者に最も高頻度に認められた「後悔」の苦悩が軽減する結果を得た。死別はうつ病罹患の危険因子となるため、本集団精神療法プログラムを用いた介入を実施し、苦悩を軽減させ、抑うつなどの気分状態を改善することは重要である。

第7章の研究6では、本集団精神療法プログラムに参加した症例の検討を行い、がん患者遺族の苦悩に対して適切な介入を行うことで、苦悩が軽減し、抑うつなどの気分状態が改善し、気づきを得ながら、否定的認知が変容され、行動範囲が広がるなどの変化が認められることを示した。

これらの研究を通して、がん患者遺族として医学的援助を求めた者に対する適切な援助として、①精神疾患（特にうつ病）の有無を確認、②がんの経過に関する医学的な誤解の確認と正確な知識の提供、③がんの経過に関する本人の否定的認知の確認とその変容の必要性が示唆された。また、これらを踏まえた集団精神療法プログラムについて、その介入前後で遺族の苦悩が軽減する可能性、さらに気分状態としての抑うつ、怒り・敵意、QOLや不安感が改善される可能性が示唆された。これにより、本集団精神療法プログラムの実施可能性と臨床的適用性が確認された。

本研究は、本邦で最も多いことが推測されるがん患者遺族に対し、適切な援助を検討した研究であり、今後のがん医療における遺族ケアに貢献することが期待される。